

大学生を対象とした ASRS (成人期の ADHD 自己記入式 症状チェックリスト) についての一考察 —その信頼性と妥当性—

井上清子 (文教大学)

キーワード: ADHD, ASRS, 大学生

問題と目的

子どもの ADHD の有病率は、3~7%といわれている。(APA 2000) ADHD の注意欠如、多動性や衝動性の症状は年齢とともに減少し、変化していくが、30~60%は、大人になっても ADHD の症状が継続する。(Mannuzza ら 1993) 日本学生支援機構の調査では、診断書を有する ADHD の学生は、997 人で前年度 (667 人) より増加している。さらに診断書はないが ADHD であることが推察され、教育上の配慮を行っている大学生も 491 人いると報告されている。インターネットなどで無償で利用できる簡易な自己記入式の ADHD のチェックリストなどは、大学生生活に困難を感じながらも相談を迷っている学生にとって、支援への一歩を踏み出すきっかけとなるかもしれない。そこで本研究では、大学生に対する、成人期の ADHD 自己記入式症状チェックリストである ASRS v1-1 (WHO・Kessler ら 2005) の信頼性と妥当性の検証の一助とすることを目的とする。

方 法

研究の目的と方法・倫理的配慮について、文書および口頭にて説明し、同意が得られた大学生 340 人 (女性 256 人、男性 84 人。年齢 18~24 歳、平均年齢 19.24±1.44。)を対象として、以下の自己記入式の質問紙調査を行った。

- ①回答者の属性 (所属・性別・年齢)
- ②ASRS v1-1 (以下 ASRS) : 6 項目に 5 段階評定で回答。
- ③ASRS の 5 段階評定の「時々」「頻繁」「非常に頻繁」は、どの程度の頻度を想定したかを、(年に・週に) と (1~2・3~4・5~6・7) の選択肢から各 1 つずつ選択。
- ④CAARS 日本語版 (中村ら 2012) : 9 つの下位尺度からなる 66 項目に 4 段階評定で回答。

結果と考察

(1) ASRS の信頼性

ASRS の内的整合性による信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を求めたところ、 $\alpha = .65$ であった。高いとはいえないが、項目数が 6 であることや、修正済み項目合計相関ですべての項目間で正の相関がみられたこと、項目が削除された場合のクロンバックの α が特に高い値を示すものがなかったことから、ある程度の信頼性があるものと考えられた。

(2) ASRS の各項目点および合計点の男女差

対象者である大学生の ASRS の合計点の平均は 8.76、標準偏差は 3.44 であった。各項目点および合計点に男女差があるかを調べるために t 検定を行った。「物事を行うにあたって難関は乗り越えたのに、最後の詳細をまとめて仕上げるのが困難だったことが、どのくらいの頻度でありましたが」「計画性を要する仕事を行う際に、作業を順序立てるのが困難だったことがどのくらいの頻度でありましたか」($p < .05$)、「約束や用事を忘れたことが、どのくらいの頻度でありましたか」「長時間座っていなければならない時に、手足を揺すったり、身もだえしたことがどのくらいの頻度でありましたか」($p < .01$) の 4 項目と合計点が、有意に男性の方が高かった。

(3) ASRS の妥当性

ASRS の妥当性を検討するために、ASRS の合計得点と標準化されている CAARS 日本語版の 9 つの下位尺度得点について、相関分析を行った。「D 自己概念の問題」のみ $r = .35$ とやや弱かったが、「A 不注意・記憶の問題」($r = .56$)、「B 多動性・落ち着きのなさ」($r = .46$)、「C 衝動性・情緒不安定」($r = .48$)、「E DSM-IV 不注意症状」($r = .60$)、「F DSM-IV 多動性・衝動性症状」($r = .49$)、「G DSM-IV 総合 ADHD 症状」($r = .60$)、「H ADHD 指標」($r = .60$) のいずれにおいても有意な中等度の正の相関がみられた。これらの結果から、ASRS は成人期の ADHD 症状チェックリストとして基準連関妥当性が高いことが確認された。

(4) ASRS における陽性率

ASRS では、6 項目中 4 項目以上で規定以上の頻度が見られた場合、ADHD の症状を持っている可能性があるとされている。(WHO・Kessler ら 2005) 今回の対象者である大学生では、43 人 (12.6%) が陽性であった。(4 問該当 31 人 (9.3%)、5 問該当 11 人 (3.2%)、6 問該当 1 人 (.3%)。) 大学生 157 人を対象として ASRS を行った三宅ら (2016) の調査では、陽性率は 41.4% であった。中村ら (2013) が 18 歳から 49 歳の男女 3910 人を対象として ASRS を行った調査では、5.0% が陽性で、20 代に多いことが報告されている。CAARS の T 得点 70 をカットオフポイントとすると、今回の大学生の ADHD 陽性者は、18 人 (5.3%) であった。

当日は、更に詳細に報告したい。